神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Consensus estimates for groups in conflict : social projection to gender in-groups, gender out-groups, and adults in general

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 美恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/815

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

葛藤的な集団間関係の下での合意性推定
――性別集団を用いた予備的研究――

田　村　美　恵

はじめに

本研究の目的は，「格差」や「不平等」が顕在化するような現実の葛藤的な集団間関係に注目し，そこでの合意性推定のあり方について実証的検討を行うことである。

合意性推定とは，ある特定の行動や選択，態度などが他の人々とどの程度合意／共有されているか，その割合に関する推定のことを指す。従来の研究は，人々が，「自分自身」の行動や選択，態度など（立場）を「手がかり」として利用し，それを自己の所属する内集団全体に投射すること（社会的投射）で合意性推定を行うことを明らかにしてきた（for reviews, Krueger, 1998, 2000; Marks & Miller, 1987; Mullen & Hu, 1988）。こうした傾向を端的に示す代表的な現象の一つは，「フォールス・コンセンサス（false consensus）効果」（Ross, Greene, & House, 1977; 以下，FC 効果）と呼ばれ，そこでは，人々が自己の立場に対する合意性を（それとは異なる立場の人々が推定するよりも）相対的に高く見積もるという傾向が見出される。これは，合意性推定の途上で，「自己」が偏重され，その立場が「多くの人々に合意されているもの」として，過度に一般化されることを示唆している（e.g., Clement & Krueger, 2000, 2002; Krueger & Clement, 1994; Krueger & Zeiger 1993）。

ところで，合意性推定の際，そもそも「自己」はどこまで投射されるのだ

ろうか。その射程（投射範囲）は，内集団にとどまるのだろうか，それとも，カテゴリー境界を越え，外集団にまで拡大されるのだろうか。また，現実場面において措定されうる集団間関係は，「内集団」対「外集団」という“水平的関係”（Krueger, 1998）のみではない。それらの集団を階層的に上位の集団（全体集団）が内包するというような“垂直的関係”もありうる。このような全体集団に関する推定にも，「自己」が投射されるのだろうか。またそれは，自己が（下位集団である）内集団や外集団に投射される程度とどのように異なるのだろうか。

こうした問いは，勢力や地位の格差が存在するような葛藤的な集団間関係において，その重要性が特に高まるものと思われる。というのも，そこにおいて，これらの問いは，単に，「社会的投射の射程を問う」という域を超え，下位集団間の葛藤的関係を内包した全体集団（社会全体）において，当の格差の解消に向けた「合意性」をどのようして形成していくのかという実践的な問題とも深く関わる（田村，2008）からである。しかしながら，従来，こうした観点の下で，勢力や地位の格差を伴うような「下位集団」（内集団，外集団）間，及び，それらを内包するような「全体集団」における社会的投射の関連性について検討している研究は，ほとんど見出されない。

これまでのところ，唯一，下位集団，及び全体集団における社会的投射の関連性について検討しているのは，Kreuger & Zeiger（1993）のみである。彼らは，実験参加者を性別によって２つの集団（男性集団と女性集団）にカテゴリー化した。そして18個の性格特性を提示し，それらが自分に当てはまるか否かを二者択一で回答させた（自己判断）。それと同時に，内集団と外集団（「男性集団」または「女性集団」），及び全体集団（「成人全体」）において，それらの特性が「当てはまる」と回答する人々の割合（合意性）を推定させた。その結果，（自己判断を投射する）社会的投射は，内集団（自分が所属する性別集団）においてしか見出されず，外集団（自分が所属しない性別集団）においては，それはほとんど見出されなかった（内集団—外集団

非対称性)。また全体集団(「成人全体」)に関しては，内集団と同程度の社会的投射が見出されていた。これらの結果に基づき，Krueger & Zeiger (1993) は，①人々が下位集団(内集団—外集団)間のカテゴリー境界にセンシティブであり，カテゴリー境界は，社会的投射を制限する(それ以上拡大させない)ものであること，また，②全体集団への社会的投射は，内集団へのそれのみを参照して行われる，言わば，「自集団中心主義(ethnocentrism)」的なものであることなどを指摘している。

ただし，彼らの研究が扱っているのは，集団間での対立的要素を出来るだけ排した非葛藤的な事項についての合意性推定であり[1)]，しかも，そこで想定されている下位集団(内集団—外集団)間の関係性も，基本的に，地位や勢力格差など，かなり対等なものである。

これに対して，社会的投射，射程をめぐる問題は，先述のように，むしろ，地位や勢力格差を伴うような葛藤的な集団間関係の下においてこそ，その重要性が高まるのではないかと思われる。また，こうした集団間関係の下では，Krueger & Zeiger (1993) とはかなり異なる合意性推定パターンが見出されることも予想される。

例えば，Granberg (1984) は，地位格差を伴う集団間関係として，「白人」対「黒人」という人種的カテゴリーを用い，集団間での合意性推定について検討している。彼は，白人と黒人の参加者を対象に，米国における「人種隔離政策」に関する賛否を３段階で評定してもらう(自己判断)とともに，内集団と外集団(白人または黒人集団)に関する推定を行わせ，各集団に自己判断がどの程度投射されるか(社会的投射)について検討した。その結果，社会的投射のあり方は，白人参加者と黒人参加者とで異なって見出された。白人の参加者は，内集団(白人集団)への投射に止まらず，外集団

1) このことは，Krueger & Zeiger (1993) で使用された合意性推定項目(MMPI から選出された性格特性項目)にも表れている。全18項目の内，１／３が男性的特性項目，１／３が女性的特性項目，残り１／３が中性的項目であり，全体として，男女間での評定バイアス(対立的要素)を出来るだけ排除するように作成されていた。

（黒人集団）に対しても社会的投射傾向を示し，隔離政策に「賛同」する者ほど，内集団と外集団における「賛同者」の割合を高く推定するという傾向が見出された（同化）。一方，黒人参加者においては，社会的投射は内集団（黒人集団）においてのみ見出され，外集団（白人集団）に対しては，ほとんど見出されなかった。Granberg（1984）は，白人参加者における「同化」現象について，人種隔離政策の下で，高地位者である白人参加者たちが，「外集団（黒人集団）でも多くの人が自分と同じように賛同しているのだ」と推定することで，格差のある現状を肯定・維持しようとする試みの現れであるとしている。

こうした研究は，地位格差を伴う集団間での合意性推定を取り扱った数少ない研究のうちの１つであり，それ自体注目に値する。しかし，そこで扱われているのは，専ら，下位集団（内集団―外集団）に関する合意性推定のあり方のみであり，それらが（内集団と外集団を内包する）「全体集団」での推定に，どのように反映されるのかについては検討されていない。

以上に基づき，本研究では，地位格差を伴うような現実の集団間関係を取り上げ，下位集団（内集団―外集団）間での合意性，並びに，それらを内包する上位集団（全体集団）における合意性推定のあり方について検討する。具体的には，本研究の実験参加者が大学生男女であることを考慮し，彼らにとって，重要で，かつ自我関与度の高いテーマとして「男女間格差」を取り上げる。そして，社会的地位／役割の男女間格差について，個々人の認識が，下位集団である内集団や外集団（「男性集団」や「女性集団」），並びに，全体集団（「社会全体」）に関する合意性推定にどのように投射されるのかについて検討する。なお，今回は，実験参加数が十分でないため，予備的検討にとどまるが，先述の Granberg（1984）に基づけば，下位集団や全体集団への社会的投射のあり方は，参加者の性別によって異なるものと予想される。

方　法

実験参加者

兵庫県下の公立大学の学生100名（男性63名，女性37名）。平均年齢19.55歳（*SD*=1.12）。

合意性推定項目

「平等主義的性役割態度スケール短縮版」（鈴木，1994）や「性差観スケール」（伊藤，1997）等を参考に，男女の社会的役割や地位の格差と関連すると思われる項目（格差関連項目）を13個作成した（Table 1）。そのうち，伝統的な性役割観を表すものは７個，平等主義的な性役割観を表すものは６個であった。また，これらの項目に，男女関係に関わるが，社会的役割や地位の格差とは関連性が低いと思われる項目（e.g.,「異性と交際する際は，自分と相手の性格が似ているほうが良い」「恋人との間でも礼儀は大切である」「男女間でも友情は成立する」）を11項目作成し，格差無関連項目とした。

なお，予備調査（男性19名，女性27名）を実施し，上記の計24項目について，男女間格差に対する主観的認知度を測定した。具体的には，「各意見に対する賛否が男性と女性の間でどの程度分かれる／対立すると思うか」について，「かなり賛否が分かれる」〜「ほとんど賛否が分かれない」の７段階で評定を求めた。その後，男女間格差の主観的認知度について，格差関連項目13個と格差無関連項目11個の平均値を男女別に算出し，項目の種類（格差関連，格差無関連）×性別（男，女）の分散分析を行った。その結果，項目の種類の主効果のみが有意であり（$F(1, 44)=70.65$, $p<.01$），格差関連項目（$M=4.99$, $SD=.73$）の方が格差無関連項目（$M=3.67$, $SD=.72$）よりも，男女間で考え方に差があると認知されていることが確認された。なお，性別の主効果（$F(1, 44)=.17$, *n.s.*），及び，項目の種類×性別の交互作用（$F(1, 44)=2.08$, n.s.）は見出されなかった。これらのことから，今回使用する格差関連項目に対しては，「（世間一般の）男女間で考え方に差がある」という認知

（格差認知）が，評定者の男女間で等しく共有されていることが確認された。

合意性推定値の測定方法

以上の格差関連項目と格差無関連項目をランダムに並べ替えて，合意性推定項目とし，それぞれの項目について，男性集団（「男性全体」），女性集団（「女性全体」），及び，全体集団（「社会全体」）に関する合意性を推定してもらった。ただし，分析対象としたのは，格差関連項目のみであり，格差無関連項目は，ダミー項目として使用した。なお，合意性推定項目24個の提示順序に関しては，4パターンを作成し，実験参加者間でカウンターバランスした。

合意性推定は，各集団毎に行ってもらい，最初に，「男性集団」もしくは「女性集団」に関する推定を行い（どちらの集団に関する推定を先にするかは，実験参加者間でカウンターバランスした），その後，全体集団に関する推定を行ってもらった。具体的な教示は，次の通りである。

「以下のような男女に関するさまざまな意見について，男性に，『賛成』か『反対』かを尋ねたとしたら，男性全体のうち，『賛成』と答える人はどのくらいいると思いますか。あなたが思った通りで結構ですので，その割合を0～100％で回答してください」。

女性集団について尋ねるときは，上記下線部と波線部を，それぞれ，「女性」と「女性全体」に代えた。また，全体集団について尋ねるときは，上記波線部を「社会全体」に代えて教示した（なお，全体集団に関する教示では，上記下線部は省略した）。

その後，各合意性推定項目に対する自己判断について，各意見に「賛成」か「反対」かを二者択一で選択してもらった。

最後に，デブリーフィングを行い，実験を終了した。

手続き

実験は，心理学関係の授業の一部を使用し，集団で行った。最初に，本研

究の目的を「男女に関するさまざまな意見に対する調査」と称し，その後，教示や合意性推定課題がすべて印刷された冊子を，実験参加者にランダムに配布した。その際，匿名性の保証，回答の際の注意点等については，口頭でも教示を行った。また，回答は，実験参加者のペースで行ってもらった。所要時間は，約20分であった。

結　果

まず，13個の格差関連項目のそれぞれについて，各実験参加者の自己判断が「賛成」であった人の割合（「賛成」の実測値）を算出した。その結果，極端な実測値（実測値が20％以下，もしくは80％以上）を有する項目が３つ（伝統的性差観を表す項目２つと平等的性差観を表す項目１つ）見出されたので，これらを分析から除外した。これは，床効果や天井効果によって，分析結果が影響を受けることを避けるためである（Krueger & Zeiger, 1993）。したがって，今回，分析対象となったのは，伝統的性差観を表す項目５項目，平等的性差観を表す項目５項目の計10項目であった（Table 1を参照）。

１．全体集団に関する合意性推定について

まず，全体集団（「社会全体」）に関する合意性推定に関して，自己判断，及び，実験参加者の性別がどのような影響を及ぼしているのかについて検討するため，各格差関連項目について，自己判断（賛成，反対）と参加者の性別（男，女）毎に，「賛成」に対する合意性推定値の平均を算出し，これらの値について，自己判断２×性別２の２要因分散分析を行った。その結果，項目７（「子供が生まれたら，男性は女性と同程度に，育児休業を取得すべきである」）を除く全ての項目で，自己判断の主効果のみが見出され，「賛成」と回答した者の方が「反対」と回答した者よりも，「賛成」に対する合意性を有意に高く推定するという FC 効果が見出された（Table 1）。このことは，「社会全体」に関する合意性推定が，全般的に，「自己」（の判断）

Table 1　全体集団に関する自己判断別の「賛成」に対する合意性推定値（%）

格差関連項目	参加者の自己判断		
	賛成		反対
＜伝統的性差観＞			
1．女性は，家事や育児をしなければならないから，フルタイムで働くより，パートタイムで働いた方がよい。	62.84	＞[1]	51.29
2．夫は外で働き，妻は家庭を守るべきである。	59.59	＞	51.29
3．経済的に不自由でなければ，女性は働かなくてよい。	63.85	＞	51.29
4．最終的に頼りになるのは，やはり男性である。	66.79	＞	51.29
5．子どもを他人に預けてまで，母親が働くことはない。	68.44	＞	56.85
＜平等的性差観＞			
6．結婚後，妻は必ずしも夫の性を名乗る必要はなく，旧姓で通してもよい。	49.15	＞	36.04
7．子供が生まれたら，男性は女性と同程度に，育児休業を取得すべきである。	51.45		38.00[2]
8．女性は，こどもができてもずっと仕事を続ける方がよい。	50.34	＞	41.00
9．すべての点を考慮してみると，男性と女性は知的には同等である。	64.04	＞	43.15
10．女性の人生において，仕事をすることは，家事や育児をすることと同じくらい重要である。	54.74	＞	43.37

1）“＞”は，「賛成」と「反対」との間で合意性推定値に有意差（$p < .01$）があること（=FC効果）を示している。
2）男性においてのみ，FC効果（$p < .01$）が見出された。

を投射することによって行われることを示唆している。なお，性別の主効果，及び交互作用は見出されず，FC効果は，性別に関わらず，男女ともに同程度に生じていた。

また，格差関連項目毎に，全体集団に対する合意性推定値と自己判断との点双列相関係数を求めたところ，得られた値は，r=.264～r=.458であり（平均は，r=.354），いずれの項目においても0より有意に大きい値（すべてp<.01）が得られた。このような結果も，上述の分散分析結果と同様，自己判断が（項目毎にその程度は異なるものの）全体集団に投射される傾向を示していると言えよう。

2．下位集団に関する合意性推定について

次に，下位集団である「男性集団」，及び「女性集団」における合意性推定のあり方について検討した。各格差関連項目について，自己判断（賛成，

反対），対象集団（男性集団，女性集団），及び実験参加者の性別（男，女）毎に，「賛成」に対する合意性推定値の平均を算出した。これらの値について，実験参加者の性別毎に，自己判断２×対象集団２の２要因分散分析を行った（第２要因は参加者内要因）。結果を Table ２，Table ３に示す。

分析の結果，まず，男性参加者（Table ２）においては，全ての項目で，自己判断の主効果が見出され，自己判断が「賛成」の者の方が「反対」の者よりも，「賛成」に対する合意性を高く見積もるという FC 効果が得られた。また，これらのうち，対象集団との交互作用が見出されたのは，項目番号２

Table 2　男性参加者における自己判断，対象集団別の「賛成」に対する合意性推定値（%）

項目番号	対象集団	自己判断 賛成	自己判断 反対	分散分析結果
＜伝統的性差観＞				
1	男性集団	67.05	48.24	FC 効果*
	女性集団	50.05	43.24	男性集団＞女性集団**
2	男性集団	69.40	45.00	FC 効果（男性集団でのみ）**
	女性集団	42.40	31.93	男性集団＞女性集団**
3	男性集団	74.00	51.82	FC 効果**
	女性集団	61.75	47.18	男性集団＞女性集団*
4	男性集団	62.00	52.38	FC 効果*
	女性集団	63.31	46.43	
5	男性集団	72.70	57.50	FC 効果**
	女性集団	62.59	41.50	男性集団＞女性集団**
＜平等的性差観＞				
6	男性集団	47.83	28.21	FC 効果**
	女性集団	57.61	39.71	男性集団＜女性集団*
7	男性集団	49.20	24.83	FC 効果**
	女性集団	61.00	47.58	男性集団＜女性集団**
8	男性集団	42.53	35.50	FC 効果+
	女性集団	53.94	41.75	男性集団＜女性集団**
9	男性集団	71.35	36.36	FC 効果**
	女性集団	78.69	40.00	
10	男性集団	55.46	41.92	FC 効果**
	女性集団	62.08	45.00	

** $p<.01$　　* $p<.05$　　+ $p<.10$

(「夫は外で働き，妻は家庭を守るべきである」) のみであり，その他の９項目においては，いずれも，自己判断×対象集団の交互作用は見出されなかった。

これらのことは，男性参加者においては，格差関連項目全般にわたって，自己判断を内集団や外集団全体に投射する傾向が顕著であり，またその強さは，内集団と外集団とで，同等に生じる（同化）ことを示している。

また，７つの項目においては，対象集団の主効果も見出されたが，そのうち，伝統的性差観を表す項目（項目番号１，２，３，５）に関しては，男性集団における合意性の方が，女性集団におけるそれよりも，一貫して高く推定

Table 3　女性参加者における自己判断，対象集団別の「賛成」に対する合意性推定値（%）

項目番号	対象集団	自己判断 賛成	自己判断 反対	分散分析結果
＜伝統的性差観＞				
1	男性集団	67.91	59.22	FC 効果**
	女性集団	58.10	44.16	男性集団＞女性集団**
2	男性集団	59.17	54.53	男性集団＞女性集団**
	女性集団	40.42	32.71	
3	男性集団	73.54	56.78	FC 効果**
	女性集団	60.04	42.30	男性集団＞女性集団**
4	男性集団	73.70	63.39	FC 効果（女性集団でのみ）**
	女性集団	69.37	49.08	男性集団＞女性集団**
5	男性集団	77.56	63.41	FC 効果**
	女性集団	60.12	48.97	男性集団＞女性集団**
＜平等的性差観＞				
6	男性集団	36.49	32.86	FC 効果（女性集団でのみ）*
	女性集団	59.14	44.50	男性集団＜女性集団**
7	男性集団	41.12	35.93	FC 効果+
	女性集団	64.39	52.50	男性集団＜女性集団**
8	男性集団	41.91	37.03	FC 効果**
	女性集団	58.94	47.20	男性集団＜女性集団**
9	男性集団	61.46	44.53	FC 効果**
	女性集団	76.46	43.60	男性集団＜女性集団*
10	男性集団	46.59	45.64	FC 効果（女性集団でのみ）**
	女性集団	64.96	52.57	男性集団＜女性集団**

** $p<.01$　　* $p<.05$　　+ $p<.10$

されていた（男性集団＞女性集団）。これに対して，平等的性差観を表す項目（項目番号６，７，８）においては，逆に，女性集団における合意性の方が，男性集団におけるそれよりも，一貫して高く推定されていた（男性集団＜女性集団）。

次に，女性参加者の結果（Table ３）についてであるが，こちらの場合にも，殆どの格差関連項目（項目番号２以外）において自己判断の主効果が見出され，自己判断が「賛成」の者の方が「反対」の者よりも，「賛成」に対する合意性を高く見積もるという FC 効果が得られた。また，これらのうち６項目（項目番号１，３，５，７，８，９）においては，対象集団との交互作用が見出されず，自己判断が，（対象集団を問わず）内集団と外集団のいずれにおいても同程度に投射されていた（同化）。

また，自己判断×対象集団の交互作用が見出された項目は，３項目（項目番号４，６，10）であり，いずれの項目においても，内集団（女性集団）においてのみ，FC 効果が見出された（内集団―外集団非対称性）。

さらに，全ての項目で，対象集団の主効果も見出され，伝統的性差観を表す項目では，女性集団よりも男性集団における合意性が高く推定される（男性集団＞女性集団）一方，平等的性差観を表す項目では，逆に，男性集団よりも女性集団における合意性の方が，一貫して高く推定されていた（男性集団＜女性集団）。

以上の結果は，男女間格差に関する合意性推定において，自己（判断）は，内集団のみならず，外集団にまで広く投射され（同化），またそれは，女性参加者よりも男性参加者において，より顕著であるという傾向を示している。加えて，男女の参加者ともに，伝統的性差観を表す項目では，男性集団における合意性を高く推定し，平等的性差観を表す項目では，女性集団における合意性を高く推定していたが，このことは，実験参加者たちが，世間一般に関して，「女性」よりも「男性」の方が保守的な意見の持ち主であると認知していることを示している。

３．下位集団と全体集団における社会的投射の関連性

下位集団（内集団，外集団）と全体集団における合意性推定の関連性について検討するため，Krueger & Zeiger（1993）に倣い，実験参加者毎に「単純投射指数（simple projection：以下，投射指数）」を算出し，分析を行った。

「投射指数」とは，一連の格差関連項目に関する自己判断（「賛成」または「反対」）とそれぞれに対応する合意性推定値との相関係数を指す。投射指数は，社会的投射の強さを示し，この投射指数を，各実験参加者内で対象集団（内集団，外集団，全体集団）毎に算出することで，社会的投射の集団間比較を，個人毎の推定パターンに基づき，より詳細かつ直接的に検討することが可能になる（Krueger & Zeiger, 1993 ; Robbins & Krueger, 2005）。

以下では，まず，対象集団，及び，参加者の性別毎に投射指数の平均値を算出した。結果を Table 4 に示す。この後，これらの値を Z' 値変換し，対象集団３（男性集団，女性集団，全体集団）×実験参加者の性別２（男，女）の２要因分散分析を行った（第１要因は参加者内要因）。その結果，対象集団の主効果（$F(2, 196)=10.93$, $p<.01$），及び，対象集団×性別の交互作用（$F(2, 196)=5.62$, $p<.01$）が有意であった。

下位検定の結果，女性参加者においてのみ，対象集団の単純主効果が有意であり（$F(2, 196)=21.16$, p<..01），多重比較（ライアン法）の結果，女性集団と全体集団（$p<.01$），女性集団と男性集団（$p<.01$），及び，全体集団と男性集団（$p<.05$）のいずれの比較においても，投射指数の平均値の間に有意な差が見出された。これらの結果は，自己（判断）を投射する程度が，内集

Table 4　対象集団，実験参加者の性別毎の単純投射指数

対象集団	男性参加者	女性参加者
男性集団	.395	.094
女性集団	.428	.495
全体集団	.347	.266

団（女性集団）において最も高く，外集団（男性集団）において最も低いことを示している。

また，女性参加者においては，全体集団への社会的投射の程度は，内集団と外集団におけるそれらのほぼ中間値ほどであった。このことは，全体集団に関する合意性推定が，内集団と外集団に関する合意性推定のあり方を同程度に考慮し，それらをちょうど折半するかたちで行われた可能性を示唆している。

一方，男性参加者においては，対象集団の単純主効果が得られなかった（$F(2, 196)=.72$, *n.s.*）。このことは，男性参加者の場合には，内集団（男性集団），外集団（女性集団），全体集団のいずれにおいても，自己がほぼ同程度に投射されていたことを示している。

考　察

本研究では，地位格差を伴う現実の集団間関係として，男女間関係を取り上げ，下位集団（内集団—外集団），及び，それらを内包する全体集団における合意性推定のあり方について検討した。その結果，合意性推定に際して，自己（判断）は，内集団のみならず，そのカテゴリー境界を越えて，全体集団にも投射されるという傾向が見出された。ただし，その傾向には，男女差も見出された。

まず，男性参加者においては，自己は，内集団と外集団に，ほぼ同程度の強さで投射されていた。また，全体集団における投射の強さも，内集団や外集団におけるそれらとほぼ同程度であった。このことは，自己（の判断）が「多くの人々に合意／共有されているもの」として，下位集団から全体集団まで広く（制限なく）一般化されたことを示している。

先述のように，Granberg（1984）は，地位格差を伴った葛藤的な集団間関係において，「高地位者」（白人参加者）が（人種隔離政策に「賛同」する）自己の立場を，内集団から外集団へと投射／一般化することで，格差の

ある現状を肯定・維持しようとする可能性について言及していた。こうした見解は，本研究にも当てはまる部分が少なからずあるだろう。すなわち，本研究が扱ったような社会的地位や役割に関して，「男性」は，「女性」と比べ，高地位者に位置すると思われる（e.g., World Economic Forum, 2010）。このような「男性」たちが，自己（の立場）を外集団や全体集団にまで際限（制限）なく投射することは，認知者自身が望むと望まざるとに関わらず，現状を肯定・維持するための「装置」として働く可能性があるのではないだろうか。

一方，女性参加者においては，自己は，内集団に最も強く投射される反面，外集団に対しては，ほとんど投射されていなかった。これは，女性参加者において，「カテゴリー境界」が社会的投射を制限／抑制する「敷居」として働いている（e.g., Clement & Kreuger, 2002）可能性を示唆している。

女性参加者において，男性参加者と異なるこうした結果が得られたのは，なぜだろうか。先述のように，社会的地位に関しては，現状では，「女性」は，「男性」よりも相対的に「低地位者」と言えるだろう。このような低地位者は，高地位者と比べ，自らの境遇により敏感であり，自己の所属する内集団と外集団の境界をより厳格に「線引き」する傾向が強いのではないかと思われる。その結果，内集団と外集団を同等のものとみなすような同化現象が抑制されたのではないだろうか。なお，先述の Granberg（1984）における「黒人参加者」の結果についても，同様の解釈が成り立つものと思われる。

また，女性参加者においては，全体集団に対する社会的投射の強さは，内集団と外集団に対するそれらのちょうど中間程度であった。今回のように，全体集団（「社会全体」）の構成員が，内集団と外集団（「男性全体」または「女性全体」）の構成員にほぼ等しく二分されるような場合には，合理的に考えれば，全体集団に対する社会的投射の強さは，内集団と外集団のそれらのちょうど平均的な値になるはずであり（Krueger & Zeiger, 1993），上記の

結果は，このような推論ルールを反映したものと捉えることが出来る。つまり，女性参加者たちは，男性参加者よりも，合理的で精緻な推定を行った可能性が高いと考えられる。

以上のような本研究の結果は，男女間で合意性推定プロセスに違いがあることを示唆するものである。しかし一方で，本研究の参加者は，全体で100名と比較的少数であり，特に，男性参加者は33名で，女性参加者の２分の１にすぎない。その点で，本研究は予備的検討の域を出ておらず，今後は，実験参加者数を増やして追試を行い，結果の信頼性を高めることが急務であろう。

また，本研究では，集団間の地位格差が合意性推定プロセスに影響を及ぼす可能性が見出されたが，こうした結果は，本研究で扱った事柄（男女間格差）に限定的なものであることも否定できない。今後は，他の集団間格差についても検討したり，集団間の地位の高低を実験変数として直接操作したりすることで，結果の一般化に向けて，知見を積み上げていくことが必要であろう。

引　用　文　献

Clement, R.W., & Krueger, J.（2000）. The primacy of self-referent information in perceptions of social consensus. *British Journal of Social Psychology,* **39**, 279-299.

Clement, R.W., & Krueger, J.（2002）. Social categorization moderates social projection. *Journal of Experimental Social Psychology,* **38**, 219-231.

Granberg, D.（1984）. Attributing attitudes to members of groups. In J. R. Eiser（Ed.）, *Attitudinal judgment*, pp.85-108. New York: Springer.

伊藤裕子（1997）. 高校生における性差観の形成環境と性役割選択―性差観スケール（SGC）作成の試み　教育心理学研究，**45**，396-404.

Krueger, J.（1998）. On the perception of social consensus. In M. P. Zanna（Ed.）, *Advances in Experimental Social Psychology,* Vol.30, pp.163-240. San Diego, CA: Academic Press.

Krueger, J.（2000）. The projective perception of the social world: A building block

of social comparison processes. In J. Suls & L.Wheeler (Eds.), *Handbook of social comparison: Theory and research*, pp.323-351. New York : Plenum/Kluwer.

Krueger, J., & Clement, R. W. (1994). The truly false consensus effect: An ineradicable and egocentric bias in social perception. *Journal of Personality and Social Psychology,* **67**, 594-610.

Krueger, J., & Zeiger, J. S. (1993). Social categorization and the truly false consensus effect. *Journal of Personality and Social Psychology,* **65**, 670-680.

Marks, G., & Miller, N. (1987). Ten years of research on the false-consensus effect: An empirical and theoreical review. *Psychological Bulletin,* **102***,* 72-90.

Mullen, B., & Hu, L. (1988). Social projection as a function of cognitive mechanisms: Two meta-analytic integrations. *British Journal of Social Psychology,* **27***,* 333-356.

Ross, L., Greene, D., & House, P. (1977). The "false consensus effect": An egocentric bias in social perception and attribution processes. *Journal of Experimental Social Psychology,* **13***,* 279-301.

鈴木淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, **65**, 34-41.

田村美恵 (2008). 集団間の競争的, 非競争的関係が社会的投射に及ぼす影響　神戸外大論叢, **59**(1), 73-90.

World Economic Forum (2010). The global gender gap report. http://www.weforum.org/issues/global-gender-gap.

本研究は, 平成20～22年度科学研究費補助金 (基盤研究 C, 課題番号 20530573) の助成を受けた。